

追憶— 東京大学在任中の西田さん

大塚 柳太郎
自然環境研究センター

西田利貞さんに私が初めてお会いしたのは、1969年の晩秋だったと思います。西田さんが、東大理学部人類学教室の助手に採用されることになり、生態人類学グループの部屋を様子見に来られた時でした。西田さんはその年の12月に着任、その後、講師そして助教授に昇進し、1988年3月まで在籍されました。私も今になって驚いているのですが、東大での教員歴は18年余と、京大の教員歴より長かったです。

西田さんは着任されると、生態人類学グループの部屋に机を置くことになりました。この部屋に常在していたのは、博士課程の原子令三さん（故人）、修士課程の私と武田淳さんで、ほかに研究生や学部学生が出入りしていただけでした。生態人類学グループが産声をあげたばかりだったのです。私たちは漁村の調査やマタギの調査をしており、サルを研究する者はいませんでした。なお、西田さんが来られた翌年の4月に、私は東大医学部人類生態学教室の助手になったので、西田さんと人類学教室で一緒だったのは4カ月間だけでした。しかし、建物もすぐ近くでしたし頻繁に顔を合わせていました。

生態人類学グループの部屋頭のような存在だったのが原子さんです。原子さんは外科医だったのですが、ピグミーに惚れ込み人類学を志した方で、30歳を既に超えていました。彼は人を惹きつけるキャラクターの持ち主で、西田さんも原子さんから影響を受けることになりました。その1つは、酒を酌み交わしながら議論することです。西田さんは、私たちが毎日のように飲みに行くのを不思議がっていたようですが、徐々に付き合ってくれる頻度が増したように思います。もっとも、西田さんは酒より食べ物に関心が強かったようです。ともかく、彼はよく食べました。もう1つは、原子さんから囲碁の手ほどきを受けたことです。西田さんよりはまりこんだ囲碁については改めて触れることにします。なお、原子さんは1970年8月から8年間近く、京大自然科学人類学研究室の助手をされています。

西田さんは、大学院生や学部学生を連れて千葉県・房総半島の高宕山に出掛け、餌づけをやめたニホンザルの群れを観察することがよくありました。私もときどきお供しましたが、西田さんが東京にいるときは違い澁刺と動き回っていたこと、とくに山歩きのスピードが速かったことを覚えています。西田さんが着任してしばらくすると、生態人類学を専攻する大学院生が増え、高宕山の調査でも、岩野泰三さんや長谷川（旧姓、平岩）真理子さんが活躍するようになりました。

時間が少し逆戻りしますが、1972年末から、西田さんと私が本の執筆で共同作業することになりました。共立出版の『生態学講座』25巻「人類の生態」の執筆（田中二郎さんを含む3名の共著）と、築地書館の『生態学辞典』（沼田真編）の中で「動物社会学・動物地理学・人間生態学」の項目の選定と執筆でした。『生態学辞典』の執筆者は、伊谷純一郎先生（故人）を筆頭に西田さんと私の3名でしたが、もっぱら私たち2名が書く破目になっ



たのです。西田さんと2人で、碁盤のないところで合宿し執筆に専念したこともありました。

このころ、西田さんから教えられたことがいろいろあります。その1つは、オリジナリティの高い研究をするのは当然としても、その成果を論文だけでなく単行本としても著すことです。東大では論文だけに価値を置く雰囲気が強かったのが、私だけでなく多くの人びとが学術書の出版に積極的になったのは、西田さんの影響が大きかったと思います。もう1つは、研究とは分かりにくいことを分かりやすくするという発想です。この点も、ある意味では京大と東大の学風の違いが関係していたかもしれません。少なくとも私は、調査データの収集や分析をするときこの指摘を大事にしてきました。

西田さんが講師と助教授のとき、1970年代半ばから1980年代半ばにかけて、京大自然科学人類学研究室出身の丹野正さん、佐藤俊さん、宝来聡さん（故人）が東大人類学教室に助手として在籍されました。原子さんが京大に移られたこともありましたが、京大自然科学人類学研究室と、東大の人類学教室と私が所属していた人類生態学教室は、親密な関係をもつようになりました。特に生態学を専攻するメンバーが、生態人類学研究会（現在の生態人類学会）を活発化させるなど盛り上がったのは、西田さんが東大で苦勞しながら教員をつづけてくれたおかげと思っています。

最後に、1988年2月22日、森巨総長や有馬朗人特別補佐なども出席して開かれた、第11回東京大学教員懇話会のことを紹介します。テーマは「海外学術調査」で、西田さんがアフリカでの野生チンパンジー調査、私がパプアニューギニアでの人類生態学調査、文学部の青柳正規さんがローマ時代の建築址の発掘を題材に話題提供しました。西田さんの話はユーモアを交え好評だったと、当時の学内広報に記載されています。東大でも海外学術調査を発展させようというメッセージが、3月に東大を去った西田さんの置土産になったのです。

追憶の最後は、西田さんが東大時代からはまった囲碁にまつわることです。京大と東大で生態人類学を専攻するメンバーには、囲碁好きが多いです。今でも年に2回、このメンバーが中心になり伊谷先生と原子さんを偲ぶ囲碁会を開いています。西田さんは、もちろんその重鎮でした。碁打ちは誰も負けず嫌いでないと困るのですが、西田さんの負けず嫌いも相当なものでした。その西田さんと盤で向い合えなくなったことが、私たちにとって

残念の極みです。今年7月9日、名古屋で「西田利貞先生を偲ぶ囲碁会」を開き、長年のお付き合いに感謝し哀悼の意を表した次第です。

西田さんに、東大時代そしてそれ以降も親しくしていただいた先輩・同僚・後輩、そして囲碁仲間を代表し、改めて心から感謝しつつ筆をおきます。

西田利貞教授を偲ぶことば

ホセア・カコンボ
ダルエスサラーム大学

ダルエスサラーム大学の野生動物保護・動物学教室の生徒や関係スタッフは、西田教授のことをいつまでも忘れないでしょう。彼はマハレに行く途中によく研究室を訪ねてくれました。とても気さくに生徒やスタッフたちと言葉を交わし、講義をしたりセミナーを開いたりしてくれました。しかし、彼の貢献は、そうしたよき指導者としての役割だけに留まりません。

西田教授は、穏やかで温かく、深い洞察力と非常に正確な知識を備えた人でした。彼の生涯をかけたアフリカでのチンパンジー調査は、当然ながら人々への興味にその根を持っていました。彼は、とくにトングウェの現地人が研究に関わることを強く望んでいました。彼は現地でも大変好かれていて、彼がやってきたというニュースは国立公園の周辺に住む人々にあっという間に広まっていた。西田教授は、彼の不在中に代わりにマハレでデータを取り続けた現地スタッフに、時計やTシャツ、写真や教科書など多くのプレゼントを贈っていました。

マハレの民族出身であるタンビラ教授と私が西田教授と一緒にマハレに入った2001年夏のこと。ある日の午後、現地のフィールドワーカーと近隣村落の人々が私たちのためにンゴマ（現地のお祭り）を開いてくれました。彼らは西田教授の到着を祝って、食べて飲んで踊りました。自分たちと同じ民族であるタンビラ教授がンゴマに参加し、驚くべき軽快さで踊り、彼らの歌を合唱してくれたので、現地の人々も日本人研究者も大興奮でした。

西田教授は、チンパンジーとその生息地はもちろんのこと、公園の周囲に住む人々の貧困についてとても心配していました。そこで西田教授と私は、現地の人々の苦境

を少しでも解消すべく、2000年カトゥンビ村に小学校を設立することになりました。その資金は、日本政府とマハレを想う人々の寄附によって賄われました。工事は32,757ドルをかけて村の人々らの手でおこない、2001年の1月に始まり、2002年の5月に完成しました。現在、中学校も造って「トシサダ・ニシダ中学校」という名にしようという提案がなされています。かつて彼は私にこう打ち明けてくれたことがあります。「カコンボさん、マハレにはやる人がたくさんあるのに、それをやる人の数は少ないし、時間もまったく足りないんですよ。」

タンザニアで仕事を続けて40年以上も経つと、タンザニアの現地紙がたまにマハレの保全や研究活動に関して正確ではない報道をすることもありました。しかし、良識や科学的誠実さを踏み越えることがない限り、西田教授がそれらを気にされることはありませんでした。

（翻訳：清野（布施）未恵子）

西田さんとトングウェ

掛谷 誠
京都大学名誉教授

2011年。未曾有の大震災・原発事故にみまわれた年に、私たちは西田さんを失ってしまった。西田さんは、自然破壊を憂え、類人猿の保護にも心血を注いでおられたが、それらの状況が悪化していく過程は、原発の数が増えていく過程でもあった。1971年に伊谷先生や西田さんとトングウェの村々を初めて訪ねたサファリを私は思いだし、丁度その頃が、時代の分岐点であったことに考えが至る。当時、伊谷さんは45歳、西田さんは30歳、私は26歳だった。その40年後、変質しながら積み重ねられてきた日本の現代文明化への営為が根底で破綻しはじめたときに、西田さんは逝ってしまわれたのである。

1971年に私たちは2回のサファリをともにした。1度目は、マハレの主峰のひとつであるシサガ山に登頂し、トングウェの地の南西部に位置するニエンダ・プラトーの村々を調査する旅だった。2度目は、ンクングウェ湾の奥からルエゲーレ川沿いに東に入ったミバンガ村に向かった。私はミバンガ村に残って周辺の村々の調査を続けた。伊谷・西田のお二人は、さらに東部奥地のイブンバ山を目指し、大型獣の狩猟に依存するブスングウェ村を訪ねられた。ブスングウェ村の生活は、原野の奥のトングウェの本来の生き方を彷彿とさせたと、伊谷・西田のお二人は興奮した口調で語っておられた。（後に私もブスングウェ村を訪問し、その生活を再確認した。）いずれも、変化に富み、充実したサファリだった。

1度目は、伊谷さんの方針にしたがったサファリだった。伊谷さんは、食料も切り詰めて可能なかぎり荷物を少なくし、軽快な足取りで原野をすすむサファリを好まれた。2度目は、西田さんが主として食料計画を担当された。日数も人数も多いサファリだったことも関わっていたのだろうが、西田流は2羽のニワトリを含めた十分な食材を持参するサファリだった。伊谷さんは自らの「最少主義」と対比して、西田流を「豪華主義」と揶揄されていたが、考えてみれば、西田流は奥地の村々にできるだけ食料の

